

## [教育実践研究報告]

### 成熟期看護学領域別実習における学生の学び：第1報

奥村 美奈子	小野 幸子	兼松 恵子	古川 直美
田中 克子	小田 和美	梅津 美香	北村 直子
原 敦子	林 幸子	坂田 直美	齋藤 和子

### What Students Have Learned through the Practice of the Science of Nursing Adults:Part1

Minako Okumura, Sachiko Ono, Keiko Kanematsu, Naomi Furukawa,  
Katsuko Tanaka, Kazumi Oda, Mika Umezu, Naoko Kitamura,  
Atsuko Hara, Sachiko Hayasi, Naomi Sakata, and Kazuko Saito

#### はじめに

本学は、平成14年度より領域別実習を開始した。成熟期看護学実習では「さまざまな健康生活を営んでいる成熟期の人々への看護実践を通じて、成熟期看護のあり方について理解を深める」を実習目的とし、健康課題の異なる人々とその家族の健康生活を理解し、看護の役割とその特性を学ぶことを実習目標としている。さらに実習目標は、どの健康課題をもつ人にも共通する具体的目標1と健康課題によって5つに分かれる具体的目標2によってより具体化され、学生は対象の健康課題に応じて、具体的目標1と2の両方を指針として実習を展開する。

このような方法で行われた初めての实習において、学生の学びを明らかにすることは、成熟期看護学実習の充実に向けて意味あることと考える。

そこで、今回は第1報として、一般病院における成熟期看護学領域別実習において、「健康回復期にある成熟期の人とその家族の看護」について実習を行った学生の学びを明らかにする。

#### 成熟期看護学領域別実習

成熟期看護学領域別実習の具体的目標は、「1. 成熟期にあるその人と家族の健康生活を理解し、看護の役割と特性を学ぶ」と、「2. 健康課題の異なる成熟期にある人とその家族を理解し、看護の役割と特性を学ぶ」である。

また、具体的目標2には健康課題に応じて、A.成熟期の人とその家族が健康維持のためにその家族の生活を確立する看護、B.健康回復期にある成熟期の人とその家族の看護、C.健康問題をもちながら生活の再編成にある成熟期の人とその家族の看護、D.生活の再構築が必要な健康障害をもつ成熟期にある人とその家族の看護、E.終末期にある成熟期の人とその家族の看護、の5つの具体的目標が示されている。

学生は、成熟期で受け持つ全対象者に共通する具体的目標1と、対象者の健康課題に応じて具体的目標2A～Eのいずれかより選択した目標の両方を指針として実習を展開する。実習終了後選択した健康課題別にA4版(45字×40行)3～5枚の範囲でケースレポートを作成する。

なお、平成14年度に一般病院で成熟期看護学領域別実習を行った学生で研究同意が得られた73名中、健康課題別の人数内訳は、Aは該当者なし、B40名、C25名、D5名、E3名である。

#### 研究目的

一般病院での成熟期看護学領域別実習で「健康回復期にある成熟期の人とその家族の看護」についての書かれたケースレポートを分析し、実習における学生の学びを明らかにするとともに、成熟期看護学における教育の充実に向けた資料とする。

表1. 成熟期看護学実習 具体的目標1及び2-B

(四角の囲みは表2の項目に相当する)

1. 成熟期にある人とその家族の健康生活を理解し、看護の役割と特性を学ぶ。
  - 1) 患者、家族とのコミュニケーションや患者、家族に関する記録物および保健医療福祉チームメンバーから情報収集し、成熟期にある人とその家族を理解し、看護ケアが必要な状態を診断できる。 1)
    - <対象理解の視点>
      - (1) 成熟期にある人個々の発達段階とその特性をふまえた現在の生活状況、発達課題達成状況、ならびにその人らしさ 理解1
      - (2) 加齢と健康状態（健康障害の種類と程度）に伴う身体的・精神心理的・社会経済的变化と発達課題の達成状況 理解2
      - (3) 過去から現在、現在から近い将来への生活の場と生活状況の変化および発達課題達成状況の変化 理解3
      - (4) 健康生活の保持・増進もしくは健康障害からの回復のために受けている保健医療福祉サービス 理解4
      - (5) その人と家族が捉えている現在と今後の見通し 理解5
      - (6) その人や家族にとって、(1)～(5)の意味や与える影響 理解6
  - 2) 成長発達の促進、発達課題達成の促進と回復、老化の予防、QOL およびその人らしさの尊重の視点から看護を計画・実施・評価できる。 2)
    - 援助の視点
      - (1) その人と家族の意向・意志を尊重した援助 援助1
      - (2) その人と家族の自立性と自律性を尊重した援助 援助2
      - (3) 看護ケアの安全性と安楽性を確保した援助 援助3
      - (4) 保健・医療・福祉との有機的な連携 援助4
  - 3) 成熟期にある人とその家族が生活している場と健康レベルに応じた看護体験を通して、看護が果たしている役割・機能の実際を理解し、成熟期看護の現状の課題を明らかにできる。 3)
2. 健康レベルの異なる成熟期にある人とその家族を理解し、看護の役割と特性を学ぶ。
  - 2-B. 健康回復期にある成熟期の人とその家族の看護
    - 1) 健康回復期にある成熟期の人とその家族の生活を理解し、看護ケアが必要な状態を診断できる。 1)
      - <対象理解の視点>
        - (1) 健康障害の回復過程にある成熟期の人の各時期における必要な課題とその特徴 理解(1)
          - a 移行期 健康回復を中心とした生活に切り換える準備をする
          - b 受容期 健康回復を中心とした生活に適應できる
          - c 回復期 以前の健康な生活に戻れる、もしくは回復状態に応じて安定した生活ができる
        - 回復過程の各時期における病態・治療・経過・予後（合併症も含む） 理解1-1
        - 回復過程におけるその人と家族に予測される日常生活規制 理解1-2
        - 回復過程におけるその人と家族の身体的、精神心理的、社会経済的影響 理解1-3
      - (2) 健康障害の回復過程に伴う生活課題 理解(2)
        - 健康回復過程に伴うその人や家族の生活の変化や生活に対する希望 理解2-1
        - 健康回復へむけてのその人や家族に必要な健康な生活のあり方 理解2-2
  - 2) 健康回復期にある成熟期の人とその家族の生活適應を促す看護を計画・実施・評価できる。 2)
    - 援助の視点
      - (1) 健康回復期の各時期に必要な課題の明確化とその適應を助ける援助 援助(1)
        - 悪化・合併症予防への援助 援助1-1
        - 安全・安楽への援助 援助1-2
        - 自己管理への援助 援助1-3
        - ストレス対処への援助 援助1-4
      - (2) 健康回復期の生活を送るための社会的・家庭的問題の相談・調整 援助(2)
        - その人や家族の回復過程を促進させるために有効な人間関係の相談・調整 援助2-1
        - 保健・医療・看護・介護・福祉活用への相談・調整 援助2-2
        - 社会経済的自立への相談・支援 援助2-3
        - 住居環境の整備への相談・支援 援助2-4
    - 3) 1)～2)を通して看護が果たしている役割・機能の実際を理解し、健康回復過程にある成熟期の人とその家族への看護の現状の課題を明らかにできる。 3)
    - 4) 1)～3)を通して、自己の課題を明らかにできる。

## ・研究方法

### 1. 研究対象

本研究の対象は、一般病院における成熟期看護学領域別実習の健康課題別ケースレポートのうち「具体的目標2-B 健康回復期にある成熟期の人とその家族の看護」について書かれたものである。平成14年度成熟期看護学領域別実習を終了した学生は77名で、研究においてケースレポートを使用することに同意が得られたのは73名であった。その内、具体的目標2-Bでレポートを作成した40名が本研究の対象者である。

### 2. 分析方法

#### 分析1：具体的目標との照合による学生の学びの分析

ケースレポートの考察および今後の課題の記述内容を分析する。まず、記述内容を繰り返し熟読し、学生の学びに着目し、1つの意味内容を含む文節を取り出す。次に、取り出した文節の内容が表1に示した項目のどれに相当するかを照合する。また、該当しない記述に関しては、意味内容によって分類し、具体的目標2-Bに追加すべき内容については、新たな項目として命名する。

以上の分析を行った後、いずれにも該当しない記述をまとめ、その内容を検討する。

#### 分析2：家族や支援者に関する学びの分析

学生ごとに、ケースレポートの考察および今後の課題の記述に、家族や支援者に関する内容が存在するか否かを確認する。

なお、今回学生の学びの照合には、平成14年度版成熟期看護学領域別実習要項を用いる。

### 3. 倫理的配慮

研究への実習レポート使用について、研究目的とレポート使用の可否が成績等に影響しないこと、プライバシー保護への配慮について口頭と書面で伝え、説明を受けた全ての学生より同意書の提出を求めた。同意書は、同意する場合としない場合ともに記入できるようにした。

## ・結果

分析結果を表2に示した。

### 1. 既存項目に該当しなかった記述

#### 1) 具体的目標2-Bに追加すべき項目

既存項目に該当しない記述を分析した結果、14名の学生の記述から「日常生活拡大への援助」と「回復意欲を

促進する援助」の2項目が得られ、援助の視点として新たに追加すべき項目とした。

#### 2) 具体的目標1・2-Bに該当しなかった記述

14名の学生から見出され、その内容を分析した結果「成熟期看護学実習上の基盤・基礎としての重要性の学び」としてまとめられた。(表3)

### 2. 「健康回復期にある成熟期の人とその家族の看護」における学生の学び

全対象者40名中、具体的目標1での学びは24名、2-Bは既存項目のみで28名、今回明らかになった2項目を追加すると33名の学生から学びが確認された。さらに、具体的目標1の中で対象理解に関する学びは17名、援助に関する学びは15名であり、具体的目標2-Bの対象理解に関する学びは11名、援助に関する学びは既存項目のみで27名、新たな2項目を追加すると32名となり最も多かった。

2-Bの援助を学んだ学生の詳細は、「健康回復過程の各時期に必要な課題の明確化とその適応を助ける援助」に関連する項目が26名で、新たに追加される2項目もこの援助に該当するため、合計32名の学生が学んだことになる。一方、「健康回復過程にある成熟期の人が生活を送るための社会的・家庭的問題の相談・調整」に関する項目を学んだ学生は5名で、両者に著しい差が認められた。

さらに、「健康回復過程の各時期に必要な課題の明確化とその適応を助ける援助」を4つの具体的援助別に見てみると、「悪化・合併症の予防」12名、「安全・安楽への援助」8名、「自己管理への援助」3名、「ストレス対処への援助」19名であり、「自己管理への援助」が最も少なかった。

次に、40名中具体的目標1・2ともに学びが認められた学生は18名(具体的目標2に2つの新項目を加え場合の1名を含む)であった。一方、具体的項目1の記述がみられなかった学生は15名、具体的目標2の記述がみられなかった学生は6名(具体的目標2に2つの新項目を加え場合の5名は2-Bの記述有りとする)、具体的目標1・2ともに認められなかった学生は1名であった。

#### 3) 家族や支援者に関する記述の有無

家族や支援者に関する記述が認められた者は、40名中18名であった。

表2. レポートのテーマが「具体的目標2-B. 健康回復期にある成熟期の人とその家族の看護」であった学生の学び

実習 ク レ ー ル	実習 施設 (注1)	受け持ち期間		具体的目標1										具体的目標2-B										2-B追加 すべき項目		成熟期看護 学実習上の 基礎・基礎 としての重 要性の学び	家族・支 援者に関 する記述																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																														
		回復期 の時期 (注2)	主な治 療開始 までの 受け持 ち日数	1) 理 解 1	理 解 2	理 解 3	理 解 4	理 解 5	理 解 6	2) 理 解 1	援 助 1	援 助 2	援 助 3	3) 理 解 (1)	理 解 (1)	理 解 1	理 解 2	理 解 (2)	理 解 1	援 助 (1)	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1			援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1	援 助 1



表3. 成熟期看護学実習上の基盤・基礎としての重要性の学び

大分類	中分類	要 約
患者・看護者間の関係の重要性・方法に関する学び	患者・看護者とも成長できる関係の重要性	患者 - 看護者がお互いに影響を受け学び成長していくことが大切である
	信頼関係が看護の基本であることの理解	患者との信頼関係が根本となり、それによってその先の看護が変わってくる
	人間関係形成の重要性	人間関係の形成があつてこそケアを提供していくことができる
	関係形成の方法	患者との関係を作っていく中で、患者の思いを聞いていくことができるということを学ぶことができた
	信頼関係形成の方法	<p>会話が信頼関係を形成すると考えていたが、会話は少なくともケア時に身体に触れたり、声かけをすることで患者との信頼関係が深まったのではないかと感じた</p> <p>ケアを受けることに気兼ねする患者に対して、積極的にケア提供を行うことで、患者から依頼を得ることができ、援助を展開していくことによって、一つの効果だけでなく幾多の効果が得られることが分かった</p>
患者とのコミュニケーションの重要性や方法に関する学び	非言語的コミュニケーションの重要性	コミュニケーションをとるにあたり、非言語的コミュニケーションの重要性を学ぶことができた
	コミュニケーション方法	コミュニケーションをとるとき、自分が相手を見ているのと同じく相手も自分を見ており、相手に緊張が伝わりぎこちない雰囲気になったり、笑顔が雰囲気を和らげコミュニケーションをとり易くすることが良く分かった
看護過程の展開の重要性に関する学び	アセスメントの大切さ	何をやるにもその意味を考えて、その人にとってケアの必要性をアセスメントしなければならないと思った
	アセスメント・計画・実施の適時性に基づく展開	情報を瞬時にアセスメントし、看護計画を立案実施し、評価していくことも大切である
	情報の適確なアセスメントの基でケアを進める重要性	専門職として客観的な視点から、経過を予測しケアを行っていく必要がある。そのため、情報に基づいた的確なアセスメントのもとでケアが進められているのか確認していく必要があると考える
	適確なアセスメントに基づく計画・実施の必要性	術後の健康回復期にある患者がどういう状態にあつて、どういう援助が必要か、ということを考えて計画し、実施していくことが必要であったと考える
	その人のケアの必要性に基づく計画・立案の必要性	本当に患者にとって必要なことなのかどうかをきちんとアセスメントできるようにしたい
	具体的な計画立案の必要性	<p>看護計画を立てる時にもっと具体的に方法を考えておかなければいけなかったと感じた</p> <p>看護技術を提供するときには、いつ、どれくらいの時間で、どのように行うかをきちんと把握しておかなければならないことを実感した</p>
	実践したケアの評価に基づくケアの重要性	術後の患者は、時間経過と共に状態がかなり変化するため、その時点で患者の状態や前日ケアの結果をみて、ケアを判断する必要があるのだと思った。そのためにも、ケアを行った後、評価することの大切さを学んだ
	根拠を持ったケアの必要性	毎日のケアひとつをとっても個々の方法を根拠を持ちながら考え、苦痛を最小限にし、前に進める方法を考え、援助していく必要性を学んだ
患者・家族のニーズに合った看護展開の重要性の学び	その人の気持ちに寄り添う看護の重要性	人間の心は常に揺れ動いているということを実感し、その気持ちに合わせて寄り添っていくことの大切さを学ぶことができた
	対象のニーズの把握の重要性	看護とは自分ができることをするという考え方から、看護とは対象が何を必要としているか、何を欲しているかを考えることなのだと気づいた
	患者と接することの重要性	関わりが短くても患者と接していれば、何に不安を抱いているか把握することは可能であり、そのため患者との関わりが大切で、看護は患者と共に行われるものだったと思った
生活者としての知識の重要性の学び	患者と家族の関係性に基づく看護介入の必要性	患者と家族とのコミュニケーションなどから関係性を把握し、看護者の介入が必要であるかを判断し、それに合ったかわり方を実行すべきだと考えた
	専門的知識のみでなく生活者としての知識の重要性	対象への指導は、十分な知識と看護職としての経験だけでなく生活者としての知識も養っていくことも大切だと感じた
患者への有効な情報提供のあり方に関する学び	患者への有効な情報提供のあり方	患者は様々なことに不安を抱えていることが分かり、医師からの手術に関する1回だけの説明では患者は理解できないことが分かった
		患者は術前オリエンテーションの場だけでは術後の状態について理解することは無理だとわかった
		患者が分からないことについて説明だけでなく、何を必要としているか把握し、患者の状態、性格、不安の程度など考慮した上で、いつ、どのような内容を話すか考え実施していく必要があると考える

## 考察

### 1. 具体的目標2 - Bで学んだ学生の目標達成度

#### 1) 学生の学びが少なかった項目について

「健康回復過程にある成熟期の人が生活を送るための社会的・家庭的問題の相談・調整」と「自己管理への援助」について学んだ学生が少なかった要因として、受け持ち時期の影響が考えられる。学生の受け持ち時期を見てみると、「a：移行期」については全く受け持たない学生も多く、受け持った場合も日数が短い。また「c：回復期」まで受け持った学生は7名と少ない。

「a：移行期」は、主な治療に向けての準備期間であり、対象がこれから始まる療養生活に専念できるよう相談・調整することが重要な援助となる。しかし、例えば手術療法の場合、在院日数短縮化に伴い<sup>1)</sup>、手術前日や当日の入院となることも多く「a：移行期」から受け持つことが難しい現状にある。また、「c：回復期」は、対象が治療によって変化した状態に適応しつつ、以前の生活に戻るための準備を進める上で相談・調整や自己管理の援助が重要となる時期である。しかし、健康回復期で学ぶ学生に対しては、対象との関係形成や対象理解を深めるために、できるだけ治療開始前もしくは直後から受け持つことができるように調整している。そのため、実習期間の制限から「c：回復期」に至るまで受け持つことが難しい状況がある。

こうした受け持ち期間の制約が学びに影響を及ぼすことに対して、健康の維持や健康障害を持ちながら生活する上での看護を目標とする「健康課題A・C・D・E」では「相談・調整」や「自己管理の援助」を学ぶ機会が多いことを踏まえ、学生間の学びが共有できるよう、臨地実習終了後の「実践と理論の統合」の充実を図る必要がある。

次に、施設によっては低侵襲手術の事例を受け持つ学生が多いところもあり、実際は短期間に「c：回復期」に至っていても、学生の学びが追いつかず「b：受容期」としての援助に留まっている場合もあるのではないかと推測する。そのため、特に対象者が短期間に退院することが予測される場合、教員は学生が対象の状況をどのように捉えているかを十分に把握し、対象の回復状況に適した看護が考えられるよう支援することが重要である。

一方、「b：受容期」であっても、回復を促進するた

めに、保健・医療・看護との相談・調整や自己管理への援助が必要な場面もあったと考えるが、この点については学生が援助を体験できなかったのか、もしくは体験していても学習の視点として捉えられなかったとも推測される。そのため、「相談・調整」や「自己管理への援助」について学生が意識できるよう教育支援をしていく必要がある。

#### 3) 具体的目標2 - Bの記述が見られなかった学生

今回、具体的目標2 - Bの記述がみられなかった学生が各クール2～3名確認された。実習レポートは具体的目標2 - Bをテーマとしながら記述が見られなかったことについて、受け持ち対象者の状態は「健康回復期」であると認識しつつも、この時期に応じた看護を考えるまでに至らなかった可能性が推測される。菊山<sup>2)</sup>は、成人看護学実習は学生にとってストレスフルな実習であり、学生は患者の言動や表情に敏感に反応し、時には患者の状態に学生自身が大きく左右されると指摘し、対象理解は時間の経過とともに表面的な理解から共感的理解へと進むが、そのレベルは学生の成熟度や他者との関わり、患者の状態などの影響を受けると述べている。今回分析対象となった「健康回復期」は、手術療法や化学療法などで身体に著しい変化を来す時期であり、たとえ3クール目の学生であっても初めての体験の中、対象理解をするだけでも必死であろうと推測する。そのため、こうした状況が、学生の学びへも影響したのではないかと考える。

また、全クールにおいて具体的目標2 - Bの記述がみられない学生がいたことは、実習の進捗と学生の習得状況が必ずしも一致するとは限らないことを示唆している。教員はどの時期であっても学生の習得状況を十分に把握するとともに、常に実習に臨む学生の心理状態に関心を向け関わっていく必要であると考えられる。

一方、今回はレポートの分析のため、実際は回復期を意識した学びがなされていたがレポートに表現されなかった可能性も否定できず、実習後に提出される目標達成に関する実習自己評価も含めて学生の学びを追求する必要があると考える。

#### 3) 具体的目標1の記述が見られなかった学生

具体的目標1は成熟期のいずれの健康課題を有する対象でも該当するいわゆる対象理解の分野である。この目

標達成に関して、実習終了後の自己評価表の提出を義務づけていることから、その視点が抜けているとはいえない。学生の印象として、健康課題別の目標達成がより意識化され印象が強化された結果であろうと推測されるが、今後追求が必要である。

#### 4) 健康課題の異なる人の家族や支援者への看護援助

半数以上の学生から記述がみられなかった。これは実習時期との関連も見られず、同じ傾向を示した。看護援助の対象として家族・支援者をも含めた援助の必要性については、実習だけでなく学内における学習においても力説している内容である。しかし、家族や支援者への看護援助については、実習期間に家族や支援者と直接会うことが難しいため、実習の目標として達成度が低いという指摘もある<sup>3)</sup>。いずれにせよ、今回表現されなかったのは、実習中で体験はした学生が至極当然のこととして表現しなかったのか、あるいは実際体験できなかったのかについては不明であり、今後追及が必要である。

## 2. 既存の項目以外の学び

### 1) 具体的目標2-Bの追加項目

学生の学びより、「日常生活拡大への援助」と「回復意欲を促進する援助」の2つが援助の視点に追加すべき項目として見出された。この2項目は、健康回復期の援助項目として明確に示すべき項目である。今回、実習要項に示されていなくても学生が必要性を感じ取れたのは、学内における学習の集積とともに、対象にとって何が必要かを感じ取る学生の感性の良さによるものと考えられる。

一方、成熟期看護学領域別実習要項は、平成14年度の実習開始に向けて教員間で検討し作り上げたものであり、実習を重ねる中で繰り返し検証し、完成度を高める必要がある。今回明らかになった「日常生活拡大への援助」は、すでに平成15年度領域別実習要項に取り入れられており、平成16年度は更に1項目が加わることとなる。

### 2) 「成熟期看護学実習上の基盤・基礎としての重要性の学び」

ここに示された記述は、関係形成の重要性や看護過程展開の重要性など、看護の基礎・基盤となる内容である。成熟期看護学のレポートで記述されていることについては、学生はこれまでの学習・実習で学び取っていたものの、成熟期看護学実習を通じて、その重要性をあらためて実感した結果と考えられる。

## 3. 研究の限界

本研究は、分析対象が学生のケースレポートであるため、学生の学びの全てを検討するには限界がある。日々の学びや学生の自己評価なども含めて、検討を重ねる必要がある。

## まとめ

- 1) 既存項目に該当しなかった記述を分析した結果、具体的目標2-Bに新たに2項目が追加された。また、具体的目標1・2ともに該当しない記述は、「成熟期看護学実習上の基盤・基礎としての重要性の学び」としてまとめられた。
- 2) 具体的目標2-Bの援助の視点における2項目について、学んだ学生数に差が生じた背景には受け持ち期間の影響が示唆され、学生間の学びの共有化を図ることの重要性が確認された。
- 3) 各クールに具体的目標2の記述がみられない学生がいたことから、学生個々の学習進度を見極めて実習を進める必要性が示唆された。
- 4) 具体的目標1および2の記述が見られなかった学生については、日々の学びや実習自己評価も含めた検討の必要性がある。

## 謝辞

本研究をまとめるにあたり、記録の使用を快諾してくださった学生の皆様に感謝いたします。またご多忙の中、学生を暖かく受け入れてくださいました、臨地指導者の方々に深く感謝いたします。

## 引用・参考文献

- 1) 財団法人 厚生統計協会編：国民衛生の動向；186，2003。
- 2) 菊山裕美，縄秀志，真弓浩子：慢性疾患患者を対象とした成人看護学実習における学生の関心と反応，長野県立看護大学紀要，3；57-68，2001。
- 3) 間瀬由記，保高由香里，他：学生の自己評価からみた成人看護実習における到達目標の検討，日本看護学教育学会誌，12；202，2002。
- 4) 上野公子，西脇友子，池田京子：臨床実習における学生の学び，日本看護学会論文集第32回看護教育；149-151，2001。

(受稿日 平成16年2月9日)